

小谷 敏 編

『子ども論を読む』
(世界思想社、2003年)

武内 清(上智大学)

本書は名著・小谷敏編『若者論を読む』の続編で、「日本の子どもたちと子どもをめぐる言説は、どのような変容をとげてきたのか」を戦後復興期から90年代にまで、9名の執筆者で明らかにしたものである。社会学の視点が中心になっているが、執筆者には政治学、教育学、心理学、思想史を専攻する者が含まれて、多様な観点で、子ども言説が考察されている。

全体は、Ⅲ部からなる。第Ⅰ部 戦後の初心とその変質、第Ⅱ部 子ども観の揺らぎ—ポスト高度成長期、第Ⅲ部 子どもと教育の未来へ—「失われた10年」の子ども言説である。

評者の能力不足から、言説研究として9編の論文がどのようにすぐれ、また問題があるのかということ論評できない。しかし、「これまでの子ども論がこのような前提に立って論じられていた」という筆者らの考察には、納得させられるものが多くあった。

各章の内容は、編者の小谷敏によって、最初に的確に要約されている。各章の要点をあげれば次のようになる。戦後教育の「初心」は「科学する心」を子どもたちに植え付け、「市民」を育てることであった。『山びこ学校』はその鮮やかな実践例で、クラスのなかに「親密な公共圏」を築き上げた(1章)。しかし戦後の初心は早々と忘れられ、高度成長期においては、早期教育熱がおこり、子どもは経済的成功をゴールとするレースの参加者となった。早期教育者達は、子どもたちが自ら学び成長する力に対して信を置いていなかった(2章)。そして子どもたちは商品や情報の消費者として、メディアに媒介されながら親もあずかり知らぬ世界に入りこんでいくようになった。マンガ否定論は、新しいメディアの登場が青少年を墮落させるという大正時代にはじまる言説のパターンの一つある(3章)。イリッチの脱学校論は60年代末の若者たちに信奉された。彼らは、依存的で自己愛の世界に生きる存在という子ども観を抜け出ることができなかった(4章)。高度成長の終焉後、さまざまな子ども問題が噴出し、子ども観の再検討が始まった。その代表者の一人の本田和子は、アモルファスな子どもの身体性を一つの異文化として提示した。それは浪費的で享乐的な80年代日本の文化と経済に適合的なものであった(5章)。80年代にいじめが深刻化し、いじめ言説の多くは、子どもたちが否定的な経験の中から学び成長する能力をもつという認識を欠いていた(6章)。「酒鬼薔薇事件」以降、子どもたちは「心の闇」を抱えた怪物に仕立て上げられた。しかし、東京と地方で少年事件に対する反応の差異はあった(7章)。日本版アダルトチルドレン言説は、大人になれない原因を幼児体験に帰着させた。子どもの成長過程での親の役割は絶対的なものとし、家庭外の他者が子どもの成長に及ぼす影響は考慮しなかった(8章)。「まじめ」や「規範」が消え去った社会で、死の意味について語ることも難しくなった(9章)。「進歩的」と目されている教育学者たちもでも、グローバル化という現実を無視した一国教育改革論議にふけり、人類社会への知的貢献という視点を欠落させていった(10章)。

評者にとって、印象的であった箇所を、断片的であるが書き留めておきたい。

「幼児教育には『有能な子ども』観と、教育は早い方がよいとする考え方が生きている」(54頁)。「悪書追放運動も(マンガ追放運動も)新興メディアに対するヒステリックな反応に過ぎない」(59頁)。「(60年代の若者の)反抗は、大人になることの拒否だった」(90頁)。「子ども時代についての大人たちの『語り』は、先行世代が自らの優位性を誇示するだけの、不毛なものに終わってしまうのが常である」(108頁)。「本田は子どもの『自然性』を抑圧する秩序の過剰のなかに噴出する子ども問題の原因をみていた」(112頁)。「90年代型いじめ論の多くは、教室や学校空間という水平的場や『いじめ=＜苦痛→死＞』のカテゴリーにとどまって(いた)」(137頁)。「厳罰派は『監視と処罰』の対象=客体として、人権派は『保護』の対象=客体としてしか子どもを見ていない。子どもは、大人のご都合主義で『子ども扱い』されている」(151頁)。「アダルトチルドレン言説を、『大人になれない』という『自分の問題』として消費する若年層を生み出した。その結果、子どもの保護・監督機関としての家族の排他的地位を強調した可能性がある」(194頁)。「過去においてこそ有効であったような処方を採用してしまう。一世代前のリアリティに人々が呪縛されていること。そこにこそ教育論議の陥穽がある」(233頁)。

ここの取り出したのは、子ども言説を考察した断片であるが、本文では具体的な事例をもとに、子ども言説に関する詳細な論証がなされている。このような言説研究からの指摘は、各種の子ども論に潜在的に埋め込まれ意識されにくいものを自覚させ、その囚われから脱し、自由に思考するのに役だつものである。

気になった点の一つがある。筆者らの立場が確固とあるのではないかということである。たとえば、次のような記述に、執筆者らの立場を伺い知ることができる。

「日本の学校の問題は、『まじめの過剰』ではなく、むしろ『本物のまじめ』を欠いていたことにあるのではないか」(iv頁)。「子どものなかに育っている主体性としての市民性をどこまで見すえているのだろうか」(151頁)。「今日の教育の危機とは、教育の理念の危機なのである。」(238頁)

このように、まじめの尊重、子どもの主体性、市民性への信頼、教育理念優先などが、執筆者らの言説考察の基底にある。これらに異論があるわけではないが、筆者らの子ども言説も、どのような時代的背景、思想的背景から出てきているのか、どのような立場から論じているのかの、自己分析が必要と感じた。「本当のまじめ」「子ども主体性」「教育理念」という言葉からの考察が、現代の社会の教育や子どもの現実を考察するのにふさわしいと考える理由についての説明がさらにほしい。

自分の立場や自分の論の前提を疑うことなく、子ども論や教育論を展開したり、調査を実施しデータを読みがちな我われ研究者や実践家にとって、子ども言説の考察を通じて、自分の足元を見据える本書は、大変刺激的で、学ぶところが多かった。